

文相勝、宜候段上聞に達し候て、天文役仰せ付られ碁の節の御切米御扶持方上り、新規二百五十石下し置かれ、還俗仰せ付られ、澁川助左衛門と相改め申候、當澁川主水先祖に御座候、碁哲義は、慶安五壬辰年九月九日病死仕候、右碁哲、初名六藏と云ひ、元祖本因坊碁砂が弟子にて、名人上手間の手合八段に進む、中村道碩と同門にて、ひとしく高名なり、然るに道碩は諸弟子に秀でたるに依て、印可狀并太閤御所より賜はりたる碁所之御證文を添えて讓之、是れより道碩義碁所仰せ付らるゆえ、碁哲に定先置かせ打ちしとなり、台徳院様○徳川秀忠碁を御好遊ばされ、不斷御前にて碁哲道碩が手合仰せ付られ、御上洛の節も御供仰せ付られ、御在京中、二條御城に於て、圍碁上覽これあり、碁譜も數局傳えあるなり、改めて仰せ付られ、勝負碁といふにはこれなくといへども、互に競争せしなり、數年の間に百二十番手合せ、道碩四十番勝ち越し候となり、

〔玉露叢十九〕寛文八年十月十九日ニ、碁知碁所ニ仰せ付ラル旨ヲ、加々爪甲斐守宅江招テ傳フ、

〔一話一言〕碁所

碁所本因坊に被仰付候書付とて、人の見せ侍りし儘、ざるし置ぬ、

享保六丑年六月九日例

大まにあひ豎紙

圍碁秀逸之間、今般碁所被仰付候、向後手合等之事、遂吟味可差計者也、

明和七年閏六月廿三日

佐渡守書判板倉

周防守松平

右京大夫松平

右近將監松平

本因坊